
砂糖と雑巾

お空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂糖と雑巾

【著者名】

ZZマーク

お空

【あらすじ】

「甘いもの」が大嫌いなカンナ。そんなカンナの最愛の彼氏は喫茶店で働いている。しかしある日、彼氏の浮気が発覚。色々な想いを抱える中、一番のショックに気付いてしまい…。

#これは求めない（前書き）

一文でも読んで頂けるだけで、幸せです。

#それは求めない

「嫌い」

カンナは、田の前に出されたショートケーキに向かつてつぶやいた。
「え」

友人が驚いてカンナを見る。
無理もない、喫茶店でショートケーキを頼んだのはカンナ自身なのだ。

「あ、いや」

陽子の驚くような視線に耐えられず、「ゴメンと軽く謝った。
「ビックリしたあ、イチゴの乗ったショートケーキは嫌いだつたんだ！イチゴのあるのと
ないのとじや全然違うもんね。私はイチゴが乗ってる方が好きだけ
ど」

「まあ」

「メニュー表に、写真一つ載つてないって、ある意味異常だよね」
陽子が手書きの可愛らしいメニュー表を取り、思つてもないこ
とをフオローした。

*

私は、甘いものが嫌いだ。

山本カンナ

「名前を漢字に当てはめるとしたら、『甘奈』でカンナじゃない？」
などと友人にほざかれた時は吐き気がしたほどだ。

目の前に出された白く輝くショートケーキ。ホイップの頂上には真
っ赤なイチゴ。

大嫌いだわ！

とは言え頼んだのは私である。

頼んだ理由、それは恥ずかしい限りなので詳しくは言わない。
だけど、私が食べるためではなく、…誰かのため。

陽子はコーヒーを一口飲んで、私のくそ不味いショートケーキよ
り一際大きいガトーショコラを崩す。

「うまそう！」

「へえ、そんなに好きなのか。

私はつい陽子をじっと見てしまつ。

ガトーショコラが口に運ばれた。

「美味しい？」

「めっちゃ美味しい」

陽子が笑った。可愛いな、と思う。

その瞬間、私の心のどこかがキュッと響いた。

#それは求めない 2

「ここ」の店良いね

私が連れてきた喫茶店は、“優香”という小さな店を陽子は気に入つたようだつた。

「そうかな？ ケーキ食べないから分かんないけど、私は好きだよ。ここ」の店

コーヒー（もちろんブラック。ミルクなど入れない）はかなりレベルが高いと思う。

「だよね」

陽子がふつと笑う。長い髪は今日も枝毛なく美しい。胸元の小さなネックレスは彼女の艶かしい肌に映えて、大人っぽさを演出している。その反面、顔や言動はちょっと幼い。まだ反抗期をぬけてないような。

「ウチになんかついてる？」

ハツと我に返る。

私は、陽子にうつとりしてしまつた。

「ついてる

「うそっ！」

陽子が鏡を取り出す。

「嘘

「もおー」

私なんかより、陽子は百倍、良い女だなと思う。こんな、肩にタトウーシールを貼つてるような私なんて足元にも及ばぬさずぎる。ヒールがいくら高くとも、陽子には届かない。

雑談に花が咲いてると、若い男性のスタッフが私たちのテーブルに来た。

陽子が不思議な顔をする。あどけなくて、また私の心を締め付ける。

「店長から、特別にデザートをどうぞ」

若いスタッフは言つ。結構カッコイイ。バイトだらうか。茶髪の髪は今どきっぽくて、鼻が高い。

唇がセクシーで吸い寄せられそうだ。

「本当ですか！ありがとうございます」

嬉しそうに陽子がお礼をした。

私は足を組かえて、デザートを眺める。餅だ。

若いスタッフが去つたのを確かめて、私と陽子は目を合わせる。

「ぶつ…餅…」

吹き出す陽子を見て私も口を押さえて笑う。

それは、白い皿に丸餅が二つ乗つっていた。醤油で焼いてあるようだつた。

私は、小さな店内を見回した。

厨房に繋がる入口の方から、熱い視線を感じた。

「カ・ン・ナ」

男の人は唇だけ動かして、私にあたたかい微笑みを送る。キュン、と胸が弾む。

苦しいと私の脳は訴える。

幸せにまみれて、甘いものを嫌う、私の脳が。

その男の人に笑顔を返した。

「どうしたの？」

陽子が私を見る。

「ううん。なんでもない」

「そつか」

「うん」

「カンナ餅食べる? つていうか餅は食べれるの?」

「うん! 食べる」

店長から特別に頃いた餅を見て笑みがこぼれる。

この店の店長は、 私の大切な人で、 彼氏である。

*

「今日は、ありがとう」

「こちらこそ」

コンビニ前で、陽子と別れる。

今日は元々、陽子のショッピングに付き合つのがメインだった。

「ねえっ」

私はつい、陽子を引き留める。

「ん？」

振り返る彼女は美しかった。空は暗くて、コンビニから漏れる照明のおかげで姿が確認できる。

無駄に明るい、コンビニの汚ない照明に照らされても美しい陽子。

「陽子はカレシとかいないの？」

思い切つて投げ掛けた質問に陽子はふつと笑つて、

「いないよっ」

そう言つて、手を振つて帰つていった。

私は携帯を開いて、時間を見た。メールが一件届いていた。

差出人は店長 隼人からだつた。急に嬉しくなる。

“いつもの公園で待つてる”

受信が三十分前だつたから、走つて待ち合わせ場所に向かつた。

「よっ」

小さな公園には隼人がベンチに座つて待つっていた。

「遅くなつてゴメン」

「いいよ。今日、店に来てくれたんだし」

隼人の優しさに、私はいつも溶けそつになる。

「餅：ありがと」

「ははっ、あんなんで悪いな。カンナ、餅なら食べられると思つて
わ」

「隼人…」

感無量と、「うと」「だらうか。

この人とずっと一緒にいたいと思つた。

「また来てな」

「うん」

もちろん、と言つて、隼人を抱きしめる。
ギュッと重なりあう体から、体温が伝わる。
私が体を離して隼人の顔を見る。

ばか。私のことスキつて、書いてあるわよ。

そう思ったのと同時に、唇が触れる。

甘いのは嫌い。

甘つたるいのはもつと嫌い。

だけど、隼人との甘いキスは好き。

我儘だつて分かっているけど、ずっとこの柔らかい唇に触れていた
いという気持ちの方が遙かに強くて、私たちは長い間キスをしてい
たと思つ。

「…カンナ。どうした？」

「えっ？」

「いつもよりカワイイ

「…ばか」

愛しくて仕方ない。

「今夜、家来る？」

「うん」

誘いが嬉しくて、今度は私から深いキスをした。喫茶店で働いてい
る隼人の舌は、甘かつた。きっとケーキでも試食したのだろう。
甘さより、私は舌の感覚に夢中であつた。

まさに、幸せの絶頂だつた。

いつか終わりがくるなんてフレーズは、一文字も浮かんでこなかつ

た。

甘いキス

「カンナ」

隼人が私の名前を呼ぶ。

行為を終えた私たちは、ベッドで横になっていた。

「なあに」

手を頬に当てて、腕で逆三角形を作る隼人が微笑む。

「好きだよ」

「あたしもだよ… 今日だって友達が隼人の作ったガトーショコラ美味しいって言つて、笑顔になつてたの見て嫉妬しちゃつた」

「何だよそれ」

隼人が吹き出す。

「何であたしは甘味が嫌いなんだろ…」

「関係ないよ。カンナはカンナだし、そんなこと問題ないだろ」

そう言つて私のおでこにキスをしてくれた。

「でも、ショートケーキ頼んだからね。食べれなかつたけど… 写メは撮つたからね」

「十分だよ」

私と隼人は5秒くらい見つめあつた。

「いつか、俺にケー キ作つてよ」

隼人は確かにそう言つた。私の本音はとんでもないと思つてしまつ。何故、嫌いなものを自ら生み出さなければいけないので。そんなことを思いながらも、

「うん」

と私は一応、応えた。

「やつた。やつぱ良いよな… 彼女の手作り」

嬉しそうにする彼氏を見て、私は作つてみても良いかなと思つた。私のつまらない愚論なんかより隼人の喜ぶことをしてあげたい。それが、何よりだつた。

「愛してるよ」

再び抱き合つたのは、言つてしまでもないだらう。

*

誰かが、私にキスをしている。

私は寝たフリをしているみたいだ。

得体の知れないそいつは、ソファの上に仰向くなつていて私の横にいた。決して上から襲いかかっているわけではない。そいつの足はピカピカなフローリングに膝立ちしているようだ。

軽く唇が触れる程度が、段々長くなる。しまいには舌が入つてきそうでならない。

案の定、私の口の中に何かが侵入してきた。

甘い。

吐き出しちゃくなる。

世界で一番、嫌いな味。

一体、私の中で何が起きているのだろう。

そんなことよりとにかく、この口の中を誰かどうにかしてほしかった。

キャラメルはお断り

しかし、そいつの正体が分からない。

誰だろう、こんなことをするのは、隼人だつたらからうじて許してあげようか。

そんなことを思つているとそいつが、やつと顔を離した。それなのにまだ私の口内には大嫌いな味が残つている。舌ではなかつた。

じゃあ、何だろう。

いくつもの疑問が浮かび上がる中、それは食べ物だと分かつた。

そいつの顔が見えた。

綺麗な長髪。

胸元のネックレス。

そいつは、ふつと微笑んだ。

笑うと意外に幼い顔。

美しい女性。

陽子だった。

「カソナ」

陽子は私の名前を呼んだ。

私の内ももにスラッとした白い手が置かれていた。そのことについては気にならなかつた。口の中に含まれている甘い物を一刻も早くどうにかして欲しい。

「えつ」

*

「カンナ」

目を開けると、隼人がいた。

「陽子？」

何が起きたのか分からぬ。

私は陽子を探した。

「ちげえよ」

隼人しかいなかつた。

寝ぼけすぎ、と隼人は笑う。

夢…、かあ。久しぶりに見た。

「あ…隼人だ」

よく見ると、といふか上半身裸だつた。そうか、あの後私は寝ていたんだ。全てを理解できた。

「俺だよ」

また隼人はバカにして笑う。

「もう」

そうは言いながらも嬉しかつた。…夢で良かつた。

「カンナは可愛いな」

「だから…」

言いかけた時、隼人は私を抱き寄せキスをした。

キスの後、隼人の上半身を見た。ふと窓を見てみる。

空は青い。嫌になるほど平和空だつた。しばらく空を眺めた。隼人は服を着ようとしていた。

つて朝じやん！

マジかよ。時計は7時を指していた。

「モロ朝帰り…」

呆然とする私を隼人がギュッとする。

「良いじやん、初朝帰り」

「うん…」

家に帰ると、鍵が閉まっていた。わー、わー、どうなるんだひつ、などと思つてみる。

誰もいなかつた。良かつた。

隼人の家での不安さが馬鹿みたいだ。
何で不在なのは深く考えないことにした。すぐ帰つてくる気がしたからだ。昨夜帰らなかつた言い訳を考えようとした。
リビングの白いソファにドサツと倒れ込む。

この感じ、やっぱり我が家。

ピカピカのフローリングにハンドバッグをテキトーに置く。
あの夢を思い出しちゃった。

言い訳よりもあの夢のことについて自問自答せし、一度と思つて出を
なにようにしよう。
このままじや、あの夢を思い出す度可憐な陽子と会話が弾まなくな
りそうだ。

目を閉じてみる。

陽子が、私にキスをして、キャラメルを口移しする。手の位
置も何だかいやらしい意味が込められている気がした。
まだ興奮状態な頭を整理させて、分かつたことが一つ。

あの甘いやつはキャラメル。

おえつ…最悪。

夢にしては味を鮮明に覚えている。よほど衝撃的だったのだひつ。

姉弟

ボーッとしていると、鍵を開ける音が聞こえた。
誰か帰ってきたようだ。

「ただいま」

弟だった。弟の守は高1の派手な方でイケてるらしく。（もちろん友達談）。

「守、朝帰り？」

ソファから飛び起きると守が即座にシッ 「む。

「ねえちゃんもだろ」

「うつさいな」

あ、そうか、と思った。

「つて牛乳ないし」

冷蔵庫をさっそく開く守が舌打ちをする。

「知らんわ。で、彼女と上手くいってるんだ」

「うつさいな」

守は私がついわざと言つた口調で真似した。

「何よ」

可愛くない弟ね、と思いながら再びソファに倒れ込む。

「母さんいないね」

守が麦茶を飲み干して言つた。

「…そうだね」

私も思つていた所だつた。

「俺らと同じことしてたりして」 んなわけねえな、と守が1人で笑う。

「えつ？まさか昨夜からいないの？」

てつきり、早朝に出掛けたのかと。

「多分な」

「確かに、電話も来てないし…」

いつもなら、帰らない日は電話がかかってくるはずだ。

「マジかよ」

守は平常を装つていたようだが、声色が焦つていた。

「もしかして守も電話来てない？」

「ああ。ねえちゃんと来てたんじゃないのかよ？」

「メールすら来てないわよ」

顔を見合わせる。

「とつとにかく、いま電話してみようぜ」

「うん」

守が携帯を開く。私は守の隣に行つて、通話を聞いたと思った。

ブルルル：

なかなか出ない。

「なあ、もしかして……」

守が急いで寝室に向かつ。

「どうしたの

母さんの携帯がポツンビベッドの上に置いてあった。

頼る私は sweet? (前書き)

わけのわからんサブタイトルになつてしまひました。
すいません。

頼る私はsweet?

「どこに行つたんだよ……」

守がビックリしている。

母さんが携帯を持たずに出掛けるなんて珍しい。

しかも、昨夜から帰つてないとのことだ。

「男の所に……？」

この家に父親はない。幼い頃に、不治の病を患い、病死した。そんなドラマチックな死に方だつたらしい。

母さんは私と守のため、必死に働き、育てた立派な母親だと、私は思つ。幼い頃から変わらない手作り料理も私は尊敬している。

「…守」

「何だよ」

「母さんを信じよう」

守は深くうなずいた。

「もし、悪い結果になつても、受け入れよう?」

「悪い結果つて……」

私の言葉に意味が理解できない守は、イラだちを感じたようだ。

「父さんの元に行つちゃつてもつてこと」

感情を押し殺したように言つたつもりだったが、声が震えた。守は私の気持ちを読み取つたようで、

「ああ」

と答えて、守は優しい眼をして母さんの携帯を自分のポケットに入れた。

*

「大丈夫?」

幼馴染みの星野菜々子が私の顔をのぞきこむ。当然だ、私がうつむ

いているのだから。

「ああ、うん…」

昔から付き合いのある、菜々子に事情を全て話した。

朝帰りしたあと、母さんがいないと

「カンちゃんのお母さんがそんなことになるなんて…珍しい」
菜々子が言った。やはりか。

“そんなこと”にもまだなっていないレベルだけど、これから“そんなこと”になる可能性は大いにあるわけだ。
そこで、大事にもならなくても、ああだこうだ言われない幼馴染み、
菜々子に相談した。

それに、菜々子なら何か有力なアイデアが浮かぶかも知れない。そう思つた。

当初は陽子に相談しようつと決めていた。
だけどあの夢が邪魔をする。気まずかった。顔を見れない気がした。
私はちつぽけな女だ。

自由人とは私のこと

菜々子は女の子らしい。

肩くらいまでのおろした髪はふわふわで、雰囲気はおつとりしているが、頭が冴えている。

現実的で意見が的確。菜々子がどんな子かと聞かれたらそう答えるだろう。

陽子のお姉さんらしい容姿に対し、菜々子は妹っぽい感じだ。
だけどちゃんと女性らしさに雰囲気は持っている、私なんかより素敵
な人だと思つ。

菜々子のお父さんは社長さんで、お母さんは厳しくて、怒つてばつかなのに綺麗で、最後は抱き締めてあげる、そんな良いお母さん
がいるという印象も強い。

母さんも素敵な人だ。

家事、子育て、仕事、人格。

子供は親を見て育つとよく言つけれど（まさしく菜々子がそうである）。

私はあんな立派な母親がいるのに、 いつまでフリーターなんだ
うづ。

「…」で、カンちゃんは結婚願望あるんだよね？

菜々子が私の顔色を伺う。

「え、…あ、ああ、うん」

実際に曖昧すぎる。不安定にうなずいた。

「カンちゃんはいいダンナ見つかるんだね」

ほんわかした口調で菜々子が言つたので、つい微笑んでしまつ。

それと反対にこのままが続くのもナインじゃない?とも聞こえる。考えすぎかも知れないが、私も就職しなきゃいけないんだな、と頭では分かっている。

「まあね。菜々子はどうなの?」

「順調よ」

全てを一言で片付けた菜々子をうりうらましく思つた。

「マジで?」

「男はキープ中だし、お仕事もつましくこつくる。おかげでまでも」

菜々子はニッコリ笑つて、ピースをとつた。

「良いなあ

私は言つた。本音である。

その後、ファミレスのハンバーグを食べながら、話に花が咲いた。本当に菜々子は良い子だなあ、と改めて思った。

将来に關しても、自分に対してもしっかり考え方を持っていて、まるで非がないといつても過言ぢやないな、と感じた。

家では守が待機しているので、安心しきつていた。

飴が落ちた瞬間

菜々子とフタミレスで別れると、自宅へ向かった。
もしかしたら母さんが帰つてきているかも知れない。
そう思つと、駆け足になつていつた。

家の前に着くと、いつもと違つ感覺を感じた。
母さんが帰つてきていますよつに。

ドアを開けようとした。

開かない。

ガチャ、ガチャ、といつ音が響く。まさか。すぐにインターホンを押した。

ピーンポーンとこちらにも聞こえた。しかし返事がない。もう一度押しても結果は変わらず、計5回鳴らしてみたけど誰も出ない。行くときは鍵を開けていた筈だ。守が閉めたのだろうか。中で倒れているとか。

とにかく電話しようと思ひ、携帯を開いた。

プルルルル…

呼び出し音が鳴る。

『ねえちゃん?』

守が出た。無事、生きていたようだ。良かつた、と安心した。

「そうよ。さつさと鍵開けて!」

『わり、俺今彼女ん家』

全然良くない！

「はつ…はあ?」

この馬鹿弟は一体何してんだ、母親がいなくなつたのにも関わらず呑気にイチャついてんのか。

『ねえちゃん』『ねえ』に行つてたんだよ

まるで反省しようとも思つていない。

「菜々子に相談しに行つたのよー直接行つた方が真面目に考えても
うれしいでしょ」

『電話で良いじゃん。俺遅くなるから』

その瞬間ツー、ツー、ツーと鳴つた。切りやがつた。しかもこのタ
イミングで。

守が留守の間、鍵は閉まつていた。その間に母さんが帰つてきていた
たら ?

えらいこいつや。

とつあえず、家の中に入ろうと思つて鍵を探した。

ネコのマスクコットをつけている鍵を、バックの中に手探りで。

「あれ?」

鍵がない。

バックの中に鍵がなかつた。

家の中に置きっぱなし…。

守は夜遅く帰つててらし。今は14:00、まだまだ時間があ
る。

わい、どうしようか。

*

仕方ないので近くのファーストフード店で時間を潰すこととした。

ハンバーガーを片手に、これからどうするか考え込む。

隼人の家、喫茶店、陽子の家…。その他色々考えは浮かんだ。
カラオケ等の遊びも悪くない。

だが、かなり重要な問題点があった。財布に入っているお金がほぼ

ないのだ。元は菜々子に相談しに行つただけだつた。ファミレスでハンバーグを食べたのもギリギリの想定外であつた。残金、1352円。しかもコインケースに入れて行つたので、バスカード、割引券、カードはもちろん入っていない。

菜々子はこれから予定があるつて言つていたし、唯一少ない友人もバイトだつたり何だりでなかなか泊めてもらえそうな所はない。いや、泊まるどうのこうのよりも私は家の前で母さんの帰りを待たなければいけないのではないか？

母さんは鍵を所持しているのではないか？しかし携帯は持つて行つていない。あ、でも私が朝帰りした時、鍵は閉まつていたような。ということは母さんは鍵を持っている。イコール、私はどこかフランクしていくもいいことなのだろうか。

色んな思考が繰り広げられる中、やはり陽子に頼らうかという想いがあつた。

しかし、あの夢がどうしても邪魔をする。思い出すと、余計頭の中がぐるぐるした。まるで嫌いなキャラメルのように。

自問自答は究極の選択

これからどうしよう。

母さんが心配なのも事実だ。

やはり隼人に相談しようか？

そのことが頭をよぎったけど、もし母さんが出掛けているだけなら余計な心配を隼人にさせるだけだ。

「隼人いまどこ？」

メールを送信した。

返信が早かった。

「図書館だよ」

とのことだった。

図書館…何でかなと疑問を抱いたけど、疑問はすぐに消えた。行つていい?と送った。しかし、満席だから、と断られてしまった。珍しかった。隼人なら、良いよって言ってくれてデートしてくれるのに。

本当に仕方ないので、私は近所をうろついていた。何か良い方法ないかな、と考えてみるけど考えれば考えるほど不安が渦巻いていく。

守の彼女の家は言つまでもなく知らない。守に帰ってきてもらおうと思った。家に入りたかった。

電話をかけてみる。

どうやら守は電源を切っているようだ。

あいつは馬鹿か。

今頃、彼女とベッドの上だらう。昼間から。

そう思つと腹が立つてへる。しかしとやう彼氏にデーター断られたんだよ、とモヤモヤした。

隼人の家に行こう、と思つた。

腹いせに驚かしてやう。母さんのことよりも自分の愛の方が大切だ、と私は考えた。

図書館が満席だからつて来ちゃダメつてヒドいじゃないか。何か理由があるのかも知れない。直感だつた。

*

隼人の家はボロい…いや、古い一階建てのアパートだ。

隼人は一階の一一番奥の部屋だ。

私は一階に上がつた。今にも折れそうなサビで覆われている階段に足をかける。体重をかける度に、階段がギシギシ、と叫ぶ。足は一番奥の部屋に向かう。

203 、隼人の部屋だ。

そつと、ドアに耳を傾ける。

心臓が何かに刺されたような思いだつた。

留守じやない…。

隼人は図書館にいる筈だ。実に15前のやりとりである。そして15分で図書館から帰るのは不可能なねだ。

体をドアに密着させる。木製でできているドアとくつついてしまいそうだつた。

話し声が聞こえてくる。

一体、誰なの。

「隼人…」

「何だよ」

「ねえ…」

会話が断片的に聞こえた。

私はもつとドアに耳をくっつけた。体の右半身は、隼人の家のドアに押し付けていた。とくに、右耳。

隼人と女の声だ。何がなんなのか理解できず、頭がこんがらがる。色々な暗い色の毛糸が絡まつてぐちゃぐちゃになるような感じだ。

「ああん…」

「ほら」

その声がドア越しに私の耳に入った。AV見てるんだよね？…そうだよね？他の女の子じゃないよね。

丸いドアノブを開けようとする衝動に駆けられる。

もし隼人が鍵を閉めていればガチャ、という音が部屋に響くだろう。私は思い切って、ドアノブに手をかけた。数センチ開けよう。そつ、3センチだ。出来るだけ音を出さないように、奥の方を握る。ゆっくり、左に回す。

鍵は、開いていた。

衝撃の事実

数センチ、ドアを開ける。

話声がよく聞こえた。残念ながら私には一人の姿が見えない。女の声の主と一致させるのに時間がかかる。信じられない。

「隼人さ、彼女いるでしょ」

間違いないく、女の声だ。

「…いないよ」

隼人が言った。

え？

「嘘ばかり」

「菜々子しか見えてないよ？」

「あんつ…嬉しい…」

はい？

私はドアをゆっくり閉めた。

先程の声を理解するのに数十秒かかったけど、全てを悟るにはそれほど時間はからなかつた。

隼人の浮気相手は菜々子だ。

隼人も菜々子も、私に嘘をつき秘密で会つてゐる。

私はもう一度ドアノブを握った。さつきの要領で回す。

今度は覗いてみた。

右目だけが隼人の部屋に侵入する感じで。

私が見たものは最悪だった。

玄関の奥に、ベッドが見える間取りになつていて。

そのベッドの上には隼人と菜々子が裸で抱き合つているではないか。

「カンナなんかに隼人は渡さないんだから…」

菜々子は隼人にキスをしながら言つた。

「菜々子カワイイ」

確かに隼人が言う。そんな。

バレる前にすぐにドアを閉めた。ボロボロの階段を駆け降りた。走つて家に帰つた。

両目からは涙がとめどなく溢れ、頬を伝い落ちていく。

大人が走りながら泣く、なんて光景はどうでも良かつた。

家の前に着くと、相変わらず鍵は閉まつていた。

ショックだつた。泣きすぎて真っ白になる。

それでも隼人への想いは消せない。胸が張り裂けそうでおまけにトゲが痛いような感覚も消えない。頭のどこかが真っ白なのだ。しばらく泣いた。

何もしなくとも涙は枯れない。

ただただ、あの場面を思い出すと目に大粒の涙が溜まり、いつしか頬を流れている。

昨日の夜、私としたのに。

そのせいで母さんの行方が分からなくなつたと言つても過言ではない。

今日の朝、キスしたのにどうして？

自分で問いかけるが答えは出ない。菜々子は今日、彼氏と会うと言つていた。菜々子の彼氏は見たことがある。お金持ちの地味な奴だ

つた。金を持つてゐる事が理由で付を立つてこると話していた。
なのこ……。

「あら、カンヅキさん。こんなところで会ひましたの?」

母さんの声が、聞こえた。

安心は母の甘い味

母さんがスース姿で私を不思議そうに見つめる。

「母さん…」

「ちょっと、コンビニに行こうと思つて行つたら昔の友達と再会しちやつて。友達の家で飲んでそのまま寝ちゃつたわ」

「え…」

「心配しなくていいの。泣かないで」

「うん…」

流れでうなずいた。

「ああ、部屋に入りましょう。何か作るわ

母さんは何事もなく鍵を開けた。優しいこの背中をもう一度と見れないと思つていた。

力が抜けた。色んな意味で。

ソファに倒れ込んだ。

朝にいた時と感覚が違うのは私の心を表しているようだった。

ボーッとしていたと思う。あれこれ考える余裕がないだけだったかもしれない。

考えるほど、物分かりは悪くない。

「ほら、出来たわよ」

気付いたら母さんが皿に乗せて何か持ってきた。

何だろう、と皿を覗いた。

ホットケーキとかいうやつだった。

「おこしいから」

母さんがニコニコと笑う。

無論、苦手な分野に入る食べ物だ。

「うん」

折角、作ってくれたからうなずいた。この感じは久しぶりである。
恐る恐るフォークで切り、口に運んだ。

「どう?」

母さんは私の感想を待つ。

どうもいつも、甘くて不味い食べ物に決まってるじゃない。

「あつ」

思わず声が出た。

「ふふ」

次は母さんが一ヶと笑う。

「そのホットケーキはシロップをかけてないの。バターだけを塗つ
たホットケーキ」

「母さん…」

「カンちゃんは、私に似て甘いものが嫌いだからね」
覚えていてくれたんだ…と心が温かくなる。母さんはそのことを正
直、もう忘れたと思っていた。

「ありがとう」

ふいにつぶやいた。

「いいのよ」

母さんは、二三二二笑っている。何故、こんなに優しいんだろう。
何故、こんなに笑顔でいれるんだろう。不思議だった。

母さんが作ってくれたホットケーキの生地は、ほんのり甘かつた。

*

浮氣相手

23：00

私は部屋で何となく携帯をいじっていた。データフォルダを眺めていると、隼人が作った、喫茶店「優香」のショートケーキの画像が目に映つた。

陽子と店に行つたとき撮つたものだつた。

私は前、隼人にこんな質問をしたことがある。

「どうして喫茶店の名前が女の人の名前なの？」

そう聞いたら、「知らない」と言われた。

隼人の本当に好きな人の名前だろうか？と、今だから考えてしまつ。

次はアドレス帳を整理しようと思つた。

気付かぬうちに登録数が増えていてビックリした。

“菜々子”

その名前を見て、考える。

本来なら菜々子は、私は彼氏がないと思っている筈だ。

ファミレスでの会話で、「カンちゃんは良いダンナ見つかるんだろうな」、みたいなことを言われたからだつた。

なのに隼人の前では“カンナには渡さない”などと言つていた。

：大体想像はつくが。

おそらく菜々子は隼人と私が一人きりでデートしているところを目撃したのだろう。

菜々子の番号に発信した。

呼び出し音が鳴ると同時に鼓動が高まるのが分かる。

『はい』

菜々子が出た。まあ当たり前の事なのだが。

「もしもし」

昔ながらの“もしもし”を口にしてみる。

『どうしたの？』

私は思わず拳に力を入れる。

用件などないからだ。

「いやつ…今日はありがと」

『ああ、ここのよ』

優しい口調で菜々子は言ったが、なぜか迷惑そうに聞こえたのはきっと私だけだと思つ。

「今日は何してた？」

まるで菜々子の彼氏のような台詞だな、と我ながら感じた。

『彼氏と遊園地よ。もちろん向こう持つでね。金持ちのここと結婚しようと思つたわ』

菜々子は嘘をついた。

いつもの私なら、素直に受け入れ、そして羨ましがっていたことだらう。

「へえ、良いなあ

一応いつものように羨ましがつた。

『ホントにそんなことないよ』

ふつと菜々子は否定した。

「その彼氏とはほした?」

言つてやつた。

『え、ああ……』

狼狽える声が聞こえてくる。
ざまあ。

『18・00には彼氏の家に行つて……、そのままよ。で、さつき無理矢理帰つてきたの』

「その彼氏のことスキ?」

私の質問攻めに戸惑う様子だった。

『まさか。あり得ないわ……お財布代わりよ』

私の……私の最愛の人はお体の相手ですか。そう思つた。

「ははつ、さすが菜々子!」

『…………』

何か言えよ。

「じゃ、また」

私が一方的に切つた。菜々子は完全にアリバイを作つてゐる。

もう句だか、菜々子がつざつたい。

女心かりのパンチ（福井県）

今回、ちよつと驚くなつました。

女心からのピンチ

私は、隼人の家の前にいた。

203と彫られている。

すいぶん前から彫られていたようだ。

私はカバンから合鍵を取り出した。

この前、菜々子に電話した後、すぐに隼人にメールをした。
電話だと上手くしゃべれる自信がなかったからだ。

「隼人いま忙しい?会いたいよ~」

とこう内容で送った。

返信だけは相変わらず早く、

「ゴメンなあ、バイト中(汗)」

予想通りの返事だった。

「合鍵作っちゃダメ?私、このままじゃ不安で死んじゃいそう」
送った後少し無理があるな、と思つたけど仕方ない。

「合鍵かあ」

と隼人は困っているようだつた。だからと言つて言い訳も思いついていないみたいだ。

返信しなければいい話を、彼女彼氏の縛りが邪魔して返信はしてくれている、そう解釈した。

「ダメな理由があるの…?」
わざと5分遅れて送信する。

「あるわけないだろ。カンナだけ愛してるんだから」
私の胸が苦しくなる。

複雑な思いを抱えながらこう返信した。
「ありがとう！じゃあ、合鍵作るね？」

それから2回ぐらい、隼人に会った。セックスはしなかった。それ
どころかキスも、愛の言葉すら交わしていない。
隼人は戸惑っていたようだけど私はあえて無視した。
ただ鍵の用件だけを話して帰った。

そんなこんなで、私は隼人の家の合鍵を持っている。
堂々と鍵を差し込み、中に入った。

目的、それは“証拠”を見つけるためだ。

もしかしたら隼人は菜々子以外にも浮気をしているかも知れない。

それと、浮気の件に関してもっと知りたい気持ちもあった。

相手がどんな女のコなのか。

相手からどんなプレゼントをもらっているのか。

多分、証拠隠滅しているだろう。私が隼人の家に呼ばれるという
ことはやましい物がない自信が溢れているからなんじゃないか。

考えながら私は一番にベッドの下をチェックした。

何もない。

菜々子と隼人は間違なくこのベッドで。
泣きたくなる気持ちを我慢して、タンスを開けた。

女のコがいるような雰囲気は全くない。

何度も来ている隼人の家も、何だか初めてくるようだった。

机の上には6個のラッピングされているお菓子らしき物があいてある。

どれも可愛いラッピングだつた。1つ手にとつてみた。

その中はマフィンとかいうお菓子だつた。

どつかで見たことあるような。

疑問を感じながら他の所を探索する。女の口の私物の1つでも落ちていたら、隼人と別れる道も視野に入れようと決心していた。

隼人のことは好きだ。

本当に愛している。

だけどこのままじゃ私は一生、浮氣する隼人を追いかけなければならぬ。

そんなの、幸せを感じれない。

第一、私はまだ若い。

フリーターだし、まだまだこれからなのだ。

「浮氣する彼氏」というレッテルが頭の中で回る。

目を閉じてみると

落ち着かない。

やつぱり隼人しか愛せない気がした。

ずっと一緒にいたいと思った。

だけど、隼人は私じゃ足りない。私が魅力不足らしい。

浮氣相手の魅力に私は勝てるんだろうか。

もう一度、ベッドの下を確認した。仕方ないからH口本でも見つかればいいんだけど。

さつきは気づかなかつたけど、奥の方に何かある。
手を伸ばしてみる。

それは何だか冷たかつた。

ベッドの下から出してみると、それは小さな金庫だった。
お金が入っているんだろう。

一体、いくらくらい稼いでいるんだろうか。

気になつた。

それは私がフリーターだからかも知れない。

開けようとするとけど、開かない。ロックがかかっている。
三桁の番号。

すぐに隼人の誕生日、315に会わせてみる。
違うようだ。

私の誕生日は四桁だから、論外である。

彼氏の稼ぎに対してもこんなに必死な彼女こそ論外なのかも知れない
が。

15分くらい経つただろうか。
適当にいじつていると、開いた。その間、随分時間が長く感じた。
開けた瞬間だつた。
ガチャガチャ、という音が響いた。

隼人が帰ってきたのだろうか。

しかし今の時間は“優香”で働いている筈だ（それを見計らって、侵入したのだから）。

合鍵で勝手に入るのはあり得ない気がしてきた。

普通、許可をとつて入るのでは。

考へてる暇はなかつた。

反射的に、押し入れの中に隠れた。

押し入れなんて、何年ぶりに入つたの？多分、小学生の時にかくれんぼで入つたつきりだ。

押し入れの中は、当然暗い。

真つ暗で何も見えない。

バタン、と音がした後、カチヤ、という音がした。
どうやらドアを閉めて鍵もかけたらしい。

息を潜める。

緊張と好奇心が体を走る。

押し入れの中の暗さにも慣れてきた。

その時、部屋に入つてきた侵入者が女だと分かった。
靴の音がヒールだったからだ。

侵入者は鍵に鈴をつけているらしく、その鈴の音がまた憎たらしく。
その思いが強まる。
誰？

一体、なぜ隼人の家に来ているんだろうか。

もしかして隼人がこれから来る、とか。

そうなれば押し入れにいる時間は長くなるだろ？

女はベッドの上に座つたようだ。ボスツ、と寝転がる音がそつだつた。

一体誰？

女と分かり、余計また鼓動が高くなる。

ふすまを三センチ開けようとした。大丈夫だ、多分。

ほんの少し開けた。

開けるまでいかないくらいに。

ベッドから足がはみでている部分しか見えない。

綺麗な脚。

私は押し入れのふすまを閉めた。謎は逆に深まるばかりだ。

「ああん…」

その時、女の喘ぎ声が聞こえた。かなり衝撃的だ。

人の部屋につかつか入りこんで自慰行為に励むなんて衝撃の他ない。

もつとも、つかつか入りこむのは私もなんだけど。

一層、女が誰なのか、もしくはどんな女性なのか気になるばかりだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7551y/>

砂糖と雑巾

2011年11月23日20時45分発行